



Title	たくさん話せるオープン質問：レッツ! 聞き上手母さん(2)
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	ファミリス, 2008(7), 22-23
Issue Date	2008-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44752
Type	article
Note	編者：社団法人 静岡県出版文化会
File Information	LKK2008_2.pdf



[Instructions for use](#)

たくさん話せるオープン質問



北海道大学大学院教授
仲 真紀子

当 たり前のことですが、会話は2人以上の話し手が交代で話すことによつて成り立ちます。「しなさい(命令)」や「してはだめ!(禁止)」は、一方的な言葉で、会話にはなりません。「私はこう考える、こう思う(陳述)」も、相手に話す間も与えず話し続けられ、独演会になってしまいます。

話を引き出す言葉かけの一つに「質問」があります。質問は、相手に話すチャンスを与えるので、話を聞くときの大きな第一歩となります。ただし、質問にもいろいろな種類があります。どんなものがあるのでしょうか？

質 問は、「開かれた質問(オープン質問ともいう)」と「閉じた質問(クローズ質問ともいう)」に分けられます。

開かれた質問とは、相手の言葉に制約をつけない、「何でも話していいよ」というタイプの質問です。「どんなことがあったのかお話しして」

「それから？ ほかに？」

といった働きかけは、みなオープン質問です。「いつ？」「どこ？」「誰？」「何？」「どうして？」などもオープン質問の仲間といていいでしょう。

「いつ」と尋ねられれば「時間」を、「誰」と尋ねられれば「人」について答えなければならぬという制約はありますが、それでも、話し手は時間や人物、場所などについて自由に話すことができます。

こ れに対し「閉じた質問」とは「宿題やったの？」などの「はい、いいえ」で答える質問や、「赤が勝ったの、白が勝ったの？」などの選択肢型の質問です。

こういう質問では、限られた選択肢から一つの答えを選ぶことしかできません。

でも、「運動会で赤が勝ったことを報告したい」と思っている子どもに、お母さんが「赤が勝ったの、白が勝ったの？」とタイミングよく聞いてあげれば、選択肢型の質問でも子どもは「聞いて聞いて！」とばかりに、「赤だよ！ 何で赤が勝ったかと言うとね……」と話せるかもしれません。

しかし、子どもが、「明日の体育、いやだなー」と思っているときに、突然「宿題やったの？」と聞かれても、「やったよ……」



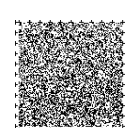
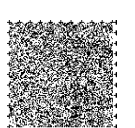
(イラスト/村松麗子)

と、気のない返事が返ってくるだけかもしれません。

これよりもっと閉じた質問もあります。「はい」という答えを強く期待する誘導質問です。たとえば「勉強好きよね」「宿題やったよね」「もうやらないよね」などの質問は「うん」という応えを強く要求します。「うん、やってない」とか、「算数だけやって、国語はまだ」などとは言わせない気迫があります。

子 どもがたくさん話せるとは、どういうことでしょうか。「同じ国語でも文章を読むのは好きだけれど、漢字を覚えるのはあまり好きではない」とか、「学校、好きなときも嫌いなときもある。なぜかっていうと、こういうときは楽しいけれど、こういうときはたいへんだなって思うから。でも、全体としてはやっぱり好きだな」など、条件分けをし、理由を説明し、現状を述べ、希望を伝えるなど、詳しく話すということだと思います。

しかし、「はい・いいえ」質問や選択肢型の質問、とりわけ誘導型の質問は、こういった複雑な回答を要求しません。たくさん話せるのは、なんといってもオープン質問、そしてWH質問(いつ、どこで、何が、どうした)です。



●なかまきこ ●福岡県生まれ。北海道大学大学院文学研究科教授。認知心理学、発達心理学専攻。母子会話、子どもの記憶に関する心理学研究のほか、子どもの司法面接、目撃証言などの研究を行っている。主な編著訳書として「目撃証言の心理学」(共著、北大路書房)、「子どもの面接法-司法手続における子どものケアガイド」(アルドリッジ・ウッド著、仲編訳、北大路書房)など。